

収穫期のメロン

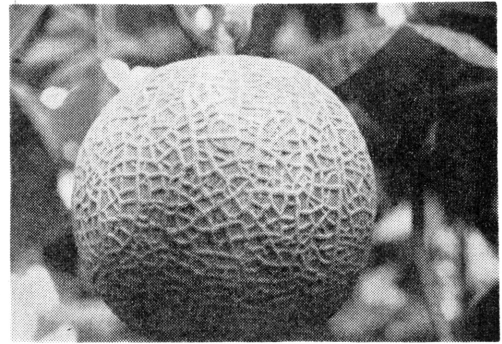
稲単作地帯にのびる

ハウスメロン (完)

秋田県農産普及課

須田雄悦

この試験から最も養分吸収の旺盛な時期は、交配前からネット完了までの約30日間で、この期間に充分養分を吸収できるような状態にしておく必要性を認めた。



られている蔓割病については、床土交換区では若干発生したが、接木区ではいずれも発生は認められなかった。

(表-4) 処理区別養分吸収量

項目	1株当施肥量 (g)						1株当吸収量 (g)				
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO	Fe	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO
圃試標準液	7.31	2.28	11.23	6.75	2.34	2.1	2.02	0.53	7.19	5.96	1.94
P 1.5倍液	7.31	4.32	11.23	6.75	2.34	2.1	2.00	0.71	7.06	5.84	2.10
K 1.5倍液	7.31	2.28	16.85	6.75	2.34	2.1	1.81	0.57	12.01	4.91	2.11
Mg 1.5倍液	7.31	2.28	11.23	6.75	3.51	2.1	1.94	0.52	6.90	5.66	2.96

台木の種類別ちがいは、ネットの密度太さに差が生じ、総合的に判断すると、南瓜台木(新土佐1号)が最もすぐれた。

この試作を通じ、接木栽培は慣行技術である床土交換区に比べ、品質的に若干劣る程度で、実用化も考えられるが、昨年は好気象に恵まれ、一般的に糖度も高く、高品質のメロンが生産された年なので、もう少し検討を重ねる必要があると考えている。

3) メロンの床土の厚さ(農 試)

床土の量をどの程度まで薄くしても、正常の果実の収穫が期待できるかという試験であるが、50cmのベッド幅では、普通15cm程度の厚さに床土を入れるが、この試験では、その半分の7.5cm区を設けて試験を行なった。

その結果、着果節位には変わりなく、糖度は床土の薄い方が増加している。果実の重量は床土の薄い方が5%程度劣っている。

したがって、若干果実が小玉気味になる以外、品質はあまりかわらないようである。

4) 接木による床土連用試作(普及所)

これは転換水田のハウスを用い、接木により連作障害を、どの程度防げるかを知るため試作を行なったものである。メロンは品種、白南遠-AKを用い、台木には新土佐1号、エメラルドセム、パーネットを用い呼び接ぎを行なったものである。

床土はメロン3作付したものを用いたが、いずれも着果位置が安定し、節前後にセットした。ネットの揃い、糖度も安定しており、最もおそれ

4. 「秋田メロン」の経済性

ハウスの利用形態は、きうり、とまと収穫後の夏作利用と、転換水田を利用したパイプハウスに

(表-5-1) 収穫時における収穫物調査

(秋田農試)

項目	着果節位	交配 節位	交配 年月日	果 重		肉の厚さ	糖度	ネット粗密	ヒタの高低	皮色	重量比
				kg	cm						
床土 15cm	13.2	8.15	1,490	13.9	14.1	4.2	12.4	密	+	E	100.0
床土 7.5cm	13.2	8.15	1,412	13.4	14.1	4.2	13.0	密	+	E	95.0

よる夏作一作型に分けられる。

表-6は夏作一作の収支であり、坪当たり収益は

(表-5-2) 追熟による減量調査

(秋田農試)

項目	10月5日 収穫時重	10月20日 追熟時重	減量重	減量比
床土 15cm	1,570	1,488	82	5.3
床土 7.5cm	1,493	1,424	69	4.6

1,065円である。これは全く無加温栽培であることと、婦女子労働も含め、一日当り労働報酬が、

(表一六) 経 済 性

(イ) 11,000m²当り生産量 3,495箱(1箱6ヶ詰) (ロ) 販売価格 昭和43年= 783円
 昭和44年 1,210円 昭和45年= 1,843円 (ハ) 販売金額(平均3.3m²当)昭和45年
 1,995円 (ニ) 3.3m²当り生産費(下記)

(経営費 3.3m ² 当)	(流通費)(3.3m ² 当1ケース)	坪当粗収入	1,995円
種子代	45円	運賃(東京出荷)	130円
肥料代	65〃	包装代	160〃
防除代	35〃	手数料	11.5% 253〃
資材代	10〃	全販連	0.5%
光熱代	9〃	市場	7.0〃
償却他	223〃	経済連	2.0〃
計	387〃	農協	2.0〃
		計	543円

1,400円程度になることは、稲単作地帯の農閑期利用としては、魅力ある作物である。

5. 水田の恒久転換として
伸びるハウスメロン

本県のハウスメロンは当初から、水稲+アルファの形で導入され、その後も水田単作地を主体に伸びてきた。今年の水田の恒久転換として大幅に伸びることが予想され、昨年の8,000ケースを大幅に上まわり、15,000ケース以上の出荷が見込まれている。

今後に残された課題としては、1戸当りの導入面積の拡大であり、技術的には商品性の向上と省力技術の導入である。

燐硝安加里で栄えの農林大臣賞 (昭和45年度全国林地肥培コンクール)

静岡の狩野さんと、その肥培方法

日本林地肥培協会主催の第11回(45年度)全国林地肥培コンクールは、各都道府県から多数の篤林家が推薦され応募しましたが、慎重審議の結果、農林大臣、林野庁長官、日本林地肥培協会長の3賞はじめ佳作、選外佳作入賞者76名の顔触れが決定し、去る5月7日栄えある表彰式が行なわれましたが、チョソ旭肥料㈱の「くみあい燐硝安加里=新緑」を使用した静岡市西草深町29-5に在住する狩野安彦さんに第2地区を代表して栄えある農林大臣賞が授与されました。

狩野さんの林地肥培について、静岡県当局の報告書は次のように報じています。

「昭和32年に所有山林の瘠悪な林地での植栽木の成長を促進することを目標に、0.8haにわたって固型肥料を用いて試験的に林地肥培を行なったのが最初である。

その結果、肥培林地の成長が目に見えて良くなったので、昭和37年から本格的に林地肥培に力を入れ、幼令林から20年生代林地へと、地力の劣る林地を中心に、毎年肥培面積を増加させ、昭和43年からは30年生代林地への肥培がはじまり、今では40haにわたって林地肥培が行なわれた。(以下略)」

[最近の肥培方法と、その決定にいたる事情]

① 年間の労務配分と肥培効果をあげるため、主に4月中旬から5月下旬までを施肥の期間としている。

② ha当り4,000~5,000本の植栽本数と肥培作業を組合わせて、下期期間の短縮と同時に、枝打の開始時期を早める。

③ 間伐後の早期閉鎖とともに、間伐材材積の増大を目標に、30年生代林地への肥培を行なうなど、成木林地肥培をも実施している。

④ 肥培作業や肥料の運搬の難易或は肥培された植栽木の健全性を検討した結果、固型林地用肥料から季園用肥料へ、更に高度化成林地用肥料へと、肥料をかえている。

[応募林分の状況]

①所有山林面積 177.67ha, ②人工造林面積146.00ha, ③肥培面積40.00ha, ④樹種 ヒノキ, ⑤林令5, ⑥本数(0.1ha当)409, ⑦樹高 332cm, ⑧胸高周囲 111cm (使用肥料=くみあい燐硝安加里新緑)

なお狩野さんのほか、佐賀県東松浦郡七山村大字馬川の諸熊巖さんが日本林地肥培協会会長賞を受賞、佳作に山形市大字岩波655の河合彦さんが入選された。

(いずれも燐硝安加里使用)